

## 「柔道から学んだこと～強くやさしい社会をめざして」

日時：平成 29 年 1 月 29 日（日）14：00～15：30

会場：こうち男女共同参画センター「ソーレ」大会議室



講師：山口 香さん（筑波大学 体育系 准教授）

女子柔道ブームに火をつけたソウル五輪銅メダリスト。13 才の時に全日本女子体重別選手権大会で優勝、以来 10 連覇。世界選手権でも数々のメダルを獲得。1989 年現役引退。現在は、筑波大学で教鞭を執る傍ら、後進の指導にあたる。また、講演・テレビ出演など多方面で活躍。

### ■著書

『日本柔道の論点』（イースト・プレス） など



私が柔道を始めたのは 6 歳のときです。今は、ほとんど聞かれなくなりましたが、当時は柔道をやりたいとか柔道って言ったら、「女だてらに」って言われたんです。

そんなことを言われた時代に、まだまだ柔道というと男の人たちばかりで、私が通った道場も女の子一人でした。そうして今までやってきた中で、やっぱり「男性も女性もやれるような環境をつくっていったほうがいいよね」というのは今でも感じていますので今日は柔道と合わせて、お話をさせていただきたいと思っています。

### ★女子柔道の歴史

今は当たり前のように女性が柔道をやる時代になりましたが、いつぐらいから始まったのかという話を少しさせていただきたいと思います。

柔道をつくったのは、嘉納治五郎という人です。戦乱の世には戦うための武術が必要でした。しかし、明治の世になり西洋文化が入ってくる中、相手を倒すイメージが強いので、柔術をまとめて技術を学ぶことによって人間を教育していこうと「柔道」と名前を変えて

つくりました。嘉納先生が28歳のときに講道館柔道をつくり、世界約200の国と地域で日本の柔道が広まってオリンピック競技にもなっています。

嘉納先生が講道館を設立してから約10年後にはもう女性の門弟を受け入れています。女性もこれからの時代は日本の力になっていくべきだと。そのためには何が必要かという、女性も自分の体に気づかって、健康や体力ということに気づかっていかなければいけないと考えたからです。

しかし、女性には試合をさせませんでした。技術がない、体力がなかったらけがをする、体をこわす、それは本末転倒だということです。最初は体をつくること、強い精神を鍛えること、それは練習の中で十分果たせるという考えだったため、なかなか試合は始まりませんでした。

#### ★女子柔道 二人の先駆者たち

私は女子柔道を切り開いたパイオニアと言われます。でも、私は試合のパイオニアです。しかし私よりもっと前に嘉納先生に教わっていたこの2人がいたから、女子柔道は今の時代があると言っても過言ではありません。

一人は、福田敬子先生。嘉納先生を教えた柔術の師範のお孫さんです。22歳から99歳で亡くなるまで、アメリカを中心にして世界各国に女性の柔道を広めるために尽くされて亡くなりました。

今の時代なら、アメリカといっても割と簡単に飛行機で行けます。しかし、まだ英語がそれほど流暢にできたわけでもない時代に貨物船で十日もかけて行ったらしいのです。ではなぜ、福田敬子先生は53歳のときアメリカ行きを決意されたのかというところに、女性の生きづらさというのが見えるわけです。

福田先生は「私はね、柔道と結婚したのよ」と言い生涯結婚されず独身でした。ご両親も亡くなられて、お兄様のところに身を寄せられていましたが、段々歳も取るにつれ、居づらくなったというのもあったと思います。アメリカに渡米し、全米を回って柔道を指導して帰るとき、「もう私は年ですから、皆様ともうお目にかかることもないでしょう」というと、アメリカ人の教え子たちが「先生が持っている柔道の技術を私たちは教えていただきたいので、ぜひまた私たちを指導してください」と強く言われたそうです。

アメリカでは技術を教わることに対しては対価が得られ、女性の先生であろうと、男性の先生であろうと自立してやっていくことができるため、53歳という年齢でアメリカ行きを決意されたのだと思っております。

もう一人はラスティ・カノコギ。ラスティはアメリカニューヨークの裕福な人たちじゃない町に生まれ育ち、体も大きかったのもあったのですが、エネルギーがあふれていて、若いころは悪いことをして不良だったといいます。柔道に出会い、やり始めるとそれまではやんちゃだったのに、自分をコントロールできるようになり、人間ができていくという事を感じて、またさらにはまっていったと語っています。

当時はアメリカであっても、女性に試合は開かれていませんでした。でも一生懸命やっ  
て強くなり、ラスティが所属していた柔道クラブが試合に出ることになりましたが、その  
試合でけがをした男性チームメイトの代わりにラスティが出場してしまったのです。見事  
にラスティのチームは優勝して、金メダルを獲得しましたが、女性であることが伝わりル  
ール違反という事でラスティの金メダルは剥奪されてしまいました。そのとき、ラスティ  
は決意するんです。こういう思いを後輩にはさせない、女だって戦いたい。金メダルを目  
指したい。頑張ったものを試せる機会をつらなければいけない。そういう世の中にしてか  
なきゃいけない。そのためには女性の試合をつくろうと活動を始めます。その当時は世界  
中で女性たちが柔道をやり始めて、女性の試合をやってほしいという雰囲気盛り上がっ  
ており国際柔道連盟も試合をすることになったのですが、開催国が決まらず困ってしま  
した。そこで当時ニューヨークの柔道連盟で役員をしていたラスティが手を挙げたこと  
でニューヨークでの第1回世界女子柔道選手権が開催されたというわけです。

その1980年の第1回大会、私の15歳のとき選手としてニューヨークへ行っていました。  
その時はラスティのことを知らなかったのですが、大会の組織委員長として座る暇がない  
ぐらいなんでもやらなくては回らないし、お金もかかり大変そうでしたが、そうやって大  
会を開催してその後の道を開いてくれたから、今女性の試合ができていくということです。

そのときラスティが言っていたのは、「日本であなたたちのような女性の柔道家が活躍で  
きるということはすばらしい。日本の社会が受け入れてくれたってことでしょう。これか  
ら日本の社会は変わるわよ。女性がもっと活躍できる様に世界に行って話さない。世界  
中の国ではまだまだ女性が、女性であるというだけで柔道ができない国は山ほどある。ス  
ポーツができない、教育が受けられない。でも、そういったところに、日本がよければい  
いではなくて、どんどん出て行って日本のスポーツを紹介さない」と言われて、亡く  
なされました。

#### ★人として強くなる

その後を継いで今柔道をやっていて思うことは、柔道というのは相手と対したときに、  
相手がすごく強そうでもやるしかないんですね。立ち向かわなきゃいけない。私は、これ  
が柔道から教わったことかなと思っています。

もちろん女性であって、そういう立ち向かわなきゃいけないことにめぐり会わず過ごせ  
れば、それはそれに超したことはないかもしれません。でも、生きていればいろんなこと  
が起きます。女性であって立ち向かわなきゃいけないとき、自分で何かを行動しなきゃ  
いけないとき、切り開いていかなければならないときというのはないとは言えません。で  
も、そのときに柔道から教わった、向かわなければいけないという気概を柔道によって、  
私たちは身につけてくれたのではないかなと思っています。

そして、柔道やスポーツのいいところは一つの自己表現です。女性であろうと男性であ  
ろうと、障害者であろうと高齢者であろうと、自分がやってみたいという気持ちを表現す

ることが大事だと思いますし、それを後押しする社会であってほしい。誰だから我慢しなさい。そうじゃなくて、やって失敗するならいいのですが、やれないという社会はおかしい。自分から前に出て、自分から何かを表現していく。それも柔道やスポーツが教えてくれることだと思っています。

もう一つは、人として強くなるということが私は必要だと思っています。ロンドンオリンピックの後に、女子柔道のナショナルチームで男性のコーチたちによる暴力を伴うパワハラ、セクハラ事件がありました。しかし、私がそのときに怒ったのは、女性の選手たちです。何で殴られたままでいたのかと。今の時代金メダルは取れるようになったかもしれない。試合場に上がれば、あんたたちは強いかもしれない。でも下りてきたら、男性のコーチに「そんなことはありません。私たちは自分でやれます」と何で言えないのかと。そういう意味では、柔道が強くなっても、人として弱くなったら柔道をやる意味がない。人としても強く、そしてリーダーシップを発揮できるような人に育ててもらいたいという思いがあります。それが後輩たちにつないでいきたいことですし、そういうことが柔道やスポーツをやる意味だということを感じていただきたいと思います。

#### ★女性のスポーツの現状

ロンドンオリンピックでは26競技中すべてに女性が参加しました。そして、さらに素晴らしいと思うのは、参加した204の国と地域、そのすべての国と地域からたった一人であってもすべて女性が参加したことは大きな飛躍であったと言われていています。女性のスポーツにとっては歴史的な出来事でした。

そして、昨年行われたリオデジャネイロオリンピック日本選手団を見てみますと、男性が174人に対して女性は164人、ロンドンでは女性選手のほうが多かったです。もうそういう時代、ほぼイコールになってきたんです。メダルの数も男性が22、女性が18、史上最多の男女合わせて41個のメダルを獲得した大成功のオリンピックでした。

ところがクリアしなければいけないのは、指導者とか役員、リーダー的な女性はまだ2割、ここをもっと上げていって女性の意思、意見が反映されるようにしていかなければならないと思っています。

そして現在でも世界の中ではまだ女性というだけでスポーツができない、あるいは教育を受けられない、選挙権がないという国もある。だから私たち日本人は、日本だけがよければいいのではなくて世界の女性の人たちと手を取りながら、みんなが生きやすい、そして力を発揮しやすい世の中にしてかなきゃいけないということをスポーツ界では考えています。

#### ★強くやさしい社会へ

今は、オリンピック・パラリンピックがセットです。東京もオリ・パラとあって、セットで話がされるようになりました。強化も今は一緒にやっています。ですから、柔道もパラ

オリンピックは視覚障害の方の柔道競技があります。指導者の交換をしたり、練習を一緒にやったり、指導者の人たちもパラリンピックの選手たちに教えに行ったりという機会が増えてきています。

私の先輩があるとき、パラリンピックの人たちの講習会に指導に行った際、初めてだったので心配になり「何か言ってはいけないことありますか」と聞いたら、主催者の人に言われたのは「大丈夫です、心配しないでください。何を言っていたいても結構です。自由にやってください。」と言われたそうです。

そして「障害というのは、その人が持っているのではなく、お互いの中にある壁だと思っています。それを取り除くということが大事なんじゃないでしょうか。お互いを理解すること、相手の立場に立ってものを考えること、そしてその障害をないものにしていくということが必要なんだと思います」

私もこの話を聞いて、目からうるここという感じがしました。パラリンピックに出場する選手の人たちに「どうしてほしい、どうやったら皆さん、お出迎えできますか」って聞くと、「ハードじゃないんです、ソフトなんです。一人一人の気持ちです。私たちは困っているときにひと声かけてくれたら、助けてもらえたらそれでいいんです。その気持ちがあれば私たちはそれ以上望みません」と一様に答えられていました。

心の壁を私たちが取り除くには、コミュニケーションが必要だし、相手の立場になって相手のことを理解するっていうことから私たちはやっていかなければいけないと思っています。私たち一人一人は違います。その違いを理解して、そして相手の立場に立ってものを考えられるようになったら、世の中というののもっともっと変わっていく。もっと生きやすくなっていくんじゃないかと思っています。

私も柔道をやってきて、男女ということではいろいろ大変なこともありました。しかしそもそも女性と男性というのは持っているものが違うというところから入らなきゃいけない。だから私は、「男女平等」というよりも「男女共同」と言った方がいいと思います。等しく同じではないと、同じものを持ってないんですから。本当の意味で私は平等になる日が来るかと思っています。

その日はいつかっていったら、男が子どもを産めるようになるとき。もうこうなれば平等です。「頼むわよ、次。私、今回頑張ったから、次あなたの番よと。できれば双子でお願いできない？一遍に男と女なんていいわね」といったような。「大丈夫よ、心配しないで。あなたが妊娠して、もう出産・育児している間は私がバリバリ働くから。あなたはゆっくり家を守ってね」。これは平等ですけど、生物学的、倫理的に考えても、いいか悪いかも分かりません。つまり、持って生まれたものが違うんです。それぐらい男性と女性には何か越えられない違いみたいなものは、生まれながらにあるんじゃないかなと思えば許せると思えませんか。ただ、一方通行ではだめなんです。男性が女性のことを理解する。女性が男性のことを理解する。理解するというよりは違うことを認めてあげること。お互いが自分の考えを言い合って、そして模索していく。それが私は世の中のあり方なのではないか

なと思います。

ですから目指していかなければいけないのは、男性でも女性でも、障害者であっても高齢者であっても、自分がやりたいと思うことができるような、そしてその違いを認めてやっていけるような世の中です。今どきの若者も持っている能力あります。私たちも遠慮することありません。私たちが生きてきた経験値があります。それを堂々と言えば彼らも聞くし、そういう双方向でお互いがものを言い合ったりするという世の中がいいのだと思います。

#### ★You touch the future

さあよいよ2020年、東京にオリンピック・パラリンピックがやってまいります。私の知っている方で、オリンピック・パラリンピックは世界の窓だと言った方がおられます。つまり、開いた窓は閉じることができません。日本も大きなところから言うと一つの家族です。お互いコミュニケーションが必要になってくる。そういった意味では、オリンピックというのはその緊張感だと思います。世界の人たちがどんどん入ってきて、日本人だけだったら見なかったふりして通り過ぎてきたことに向き合っていかなきゃいけない。その時期が来たように思います。世界の人たちとやり合っていかなきゃいけない。外の目から見たときに日本はどうなんだろうということに向き合うチャンスです。

私たち一人一人が持って見逃してきた男女の問題、障害者の問題、高齢者の問題、すべて私たちが持っているものだという事です。そこに人ごとではなく向かい合いながら、どうすれば日本がよくなっていくのかを考えるのが、これからの数年間だと思っています。

サッカーの研修会に参加したとき、どうやって指導者はあるべきかという話があり、その中で言われた言葉が「You touch the future」（私たちは、あなたたちは、(選手たちの)未来に触れている) いい言葉だなと思いました。つまり、私たち一人一人が考えること、言うこと、行動することが次の世代をつくることにつながるっているということです。すばらしいなと思って、伝えていきたいなと思っています。

いろいろお話をさせていただきましたけれども、お一人お一人が何かを感じていただいて、男性、女性だけではなくて、一人一人がみんな違う。その一人一人が輝けるような、そして生かされるような社会に皆が力を出し合ってつくっていければ、すばらしい日本になっていくんじゃないかなと信じています。